［第九話］

橋本左内

安政の大獄とは、幕府の大老の井伊直弼が、勤皇の志士や幕府の方針に反対する人びとを、大量に逮捕・投獄し、さらには処刑した事件です。

犠牲となった人たちのなかで、とりわけ惜しく痛ましい人物、そしてその死がわが国の大きな損失となったと考えられるのは、吉田松陰と橋本左内であるといわれております。

この二人は、安政六年（一八五九）十月、江戸伝馬町の牢獄刑場において死刑となり、武蔵の野の露と消えました。吉田松陰は第八話で述べた通りです。

橋本左内は本名綱紀、景岳と号しました。越前福井の松平慶永（春嶽）という殿さまに用いられ、明治維新の前夜、大きな働きをします。そのため井伊大老に憎まれたのです。

左内は藩医の家に生まれ、子どものころから父の診療を手伝い、患者日誌もつけました。塾の友人が手を傷つけ、医者の子だから治療してくれと頼まれ、焼きごてをあてようとします。友人が驚いてわけを聞くと、やけどの治療なら、父に習ったのでできる、なま傷をいったんやけどにしてその上で手当てをする、と答えたという逸話はこの時期です。これは左内の合理主義的な一面をあざやかに物語るものであります。

大阪で緒方洪庵の適塾に学び、当時としては最新のオランダの学問を修めた医師となりました。藩主の慶永公は、左内の学識と人間を信頼し、藩の学校明道館の学監（今でいえば教頭）を命じて、教育の改革と推進に当たらせます。

また江戸に出ては、藩主の手足となって国事に奔走し、水戸の藤田東湖や薩摩の西郷隆盛と交わりました。左内は世界の情勢に通じ、政治的にもきわめてすぐれた識見を持っていましたが、小柄で色の白い、女子のように見える青年だったため、西郷は初対面のとき軽くあつかいました。

話を聞いているうちになみなみならぬ人物と知り、後悔した西郷は翌日正装して詫びに行き、以後年下の左内をまるで先生のように尊敬した話は有名です。

左内が十四歳のとき執筆した「啓発録」という本があります。自分自身の修養の指針として書いたもので、他人に示すための文章ではありませんでしたが、のち弟の綱常（陸軍軍医総監）から、明治天皇に献上、皇室の宝物としてたいせつに伝えられています。

「啓発録」は、

稚心ヲ去ル　気ヲ振ルウ　志ヲ立ツ

学ニ勉ム　交友ヲ択ブ

の五項目からなっており、それぞれに解説の文章がついています。とても現在の中学三年や高校一年くらいの少年が書いたとは思われない、すばらしい文章であり、立派な内容です。「稚心ヲ去ル」というのは、子どもっぽい、あまえた心を去ろう、いつまでも幼い心のままでいては成長しないぞと、自分に言い聞かせて

いるわけです。私は全校集会でよく生徒諸君にこの言葉を話しました。

今の中学生・高校生に、若い人たちに、ぜひ左内少年の心がけを学んでもらいたいものであります。

安政六年（一八五九）二十六歳没

○　あの西郷隆盛が左内を先生のように尊敬をしたとは……。

そして若くして死刑となる。世の中に影響力をもった人物は違う。「橋本左内」歴史に名が残りました。

○　「稚心を去る」私は五十六歳ですが、いまだに子どものような心があります。反省をして、相手を喜ばす人間になりたいものです。

（M生）